

文部科学大臣 萩生田光一 様
文化庁長官 宮田亮平 様

あいちトリエンナーレへの補助金交付中止に抗議します

お二人が、果たしてこの文章を読んでくださるかどうか分かりませんが、事務の方でも良い、どなたかが読んでくださると信じて、書き始めることにします。

私は、あいちトリエンナーレ2019に出展された、田中功起さんの「抽象／家族」の出演者のひとりです。田中功起さんの作品の映像部分には、主に、4人の出演者が登場します。4人とも、片方の親が日本人ではない、いわゆる「ハーフ」と呼ばれる存在です。4人の片方の親が抱えている背景は一樣ではありませんが、そういう存在であることを理由に、出演を呼びかけられたのです。

そのような映像が3つに分割されて、別々の仕方で同時に上映され、抽象画や映像内で用いられたテーブルなどが配置されている。インスタレーションと呼ぶのでしょうか。その全てが「抽象／絵画」という作品です。宮田先生なら良くご存知かもしれません。

あいちトリエンナーレの内覧会（7月31日）に出席し、住んでいる東京に帰ってからすぐ、たくさんの情報が飛び込んで来ました。8月1日には松井一郎大阪市長が「にわか信じがたい！河村市長に確かめてみよう」とツイートし、そのツイートに呼応して河村たかし名古屋市長は翌2日に「表現の不自由展・その後」を視察し、その後の取材で「平和の少女像」の展示を中止するよう大村秀章・愛知県知事に求めることを表明しました。同日、菅義偉官房長官が「補助金交付の決定にあたっては、事実関係を確認、精査して適切に対応したい」と発言し、柴山昌彦・文部科学大臣も補助金の問題に言及しました。自民党の保守系議員でつくる「日本の尊厳と国益を護る会」（代表幹事・青山繁晴参議院議員）も、少女像について「公金を投じるべきでなく、国や関係自治体に適切な対応を求める」との声明を出しました。

いずれの発言も「平和の少女像」を巡るもので、その主張の中に含まれているのは、歴史認識（歴史修正主義）の問題でした。実際に発端となった松井市長のツイートにぶらさがっているリプライには、従軍慰安婦という捏造された歴史を展示することへの批判が、多数見られます。これはとどまることを知らずに拡散し、電話やFAXによる抗議となって広がりました。

私は、片親が外国人であるハーフだと最初に申し上げました。私の父方の祖父母は、第二次大戦中に日本に来て働き、日本で父を含む三人の子どもを生んで育てました。私は「表現の不自由展・その後」を巡る最初の騒動を目にして、まるで自分の祖母の尊厳が侵されているような気持ちになりました。

私にとって「平和の少女像」に暴力的な言葉を吐きかけ、歴史修正主義的な主張を折り込み、公金支出の問題とからめて、このSNSが発達した時代に世論を誤った方向に導いて、あっという間に展示を中止させて「平和の少女像」を排除した事実は、同時代を生きていた、一人の若い女性であった祖母の排除に他なりません。そして祖母を排除するということは、私という今を生きる存在と、私を育み、私がその一員である今の家族を、なかったことにするのと同じなのです。

補助金交付中止が孕んでいる問題の数々は、様々なところで論じられていますし、これからも論じられるでしょう。それらはその問題の専門家である人々にお任せすることにして、私からは、ただひとつのお願いを申し上げたいと思います。

補助金交付中止の直接の理由は、公には手続きの瑕疵の問題ですが、根底には「平和の少女像」への強い拒否と反発、歴史修正主義、そして眼前からの排除の思想が隠されています（他

の作品については今は置いておきます）。そのように手続きの瑕疵を理由に事後的に補助金交付を中止するという行為は、脅迫によって「平和の少女像」の展示を中止するという暴力行為を正当化することを意味します。また、将来にわたって「平和の少女像」は展示することができないのだという思いをアーティストや美術館に内面化させてしまい、自己検閲を連鎖的に引き起こしてしまうでしょう。

どうか、そのような仕方、戦時下の植民地支配の中で、従軍慰安婦とされて生き、生まれ故郷を離れて祖母のように生きた若い朝鮮人女性たちの「命」を無かったことにしないでください。その存在を抹殺しないでください。その苦しみの中からも立ち上がって、朝鮮半島で、この日本で、続いているたくさんの「命」を、無かったことにしないでください。その存在を抹殺しないでください。

私は、決して、発言することを止めません。今までもあらゆる仕方、無かったことにされ、抹殺されてきた中で、奇跡のように紡がれてきた「命」のつらなりに、私の「命」が存在し、私も私と共にある家族も、今を生きていて、これからも生きていくからです。

2019年10月7日
安田直人